

ART ESSAY

アート★エッセイ

「割れの形状を金で表す」

平澤 白水

(平澤流金繕い研究所主宰)



日本には古来より「金繕い」と呼ばれる器の修理法がある。破損してしまった器を再び使えるように接着、形成して金で化粧を施す技法である。「金継ぎ」「金直し」「うるし直し」とも言われているが、器に対して愛情を込めて直すという意味では、「継ぐ」「直す」と言うより、「繕う」のほうが、個人的に好ましく思い、使用している。

金繕いの技法は茶の湯とともに桃山期頃から発展した。当時は器が大変希少で、丁寧に扱われたに違いない。壊れてしまった器を再度使えるようにしたいという気持ちは今より強かったであろう。修理に用いる接着剤は澱粉糊や膠、漆くらいしかなかった。中でも一番結着力が強いのが澱粉糊と生漆を混ぜた麦漆だ。普段より漆を扱っているのは、塗師や蒔絵師であるから、当然、破損してしまった器の修理を依頼された。

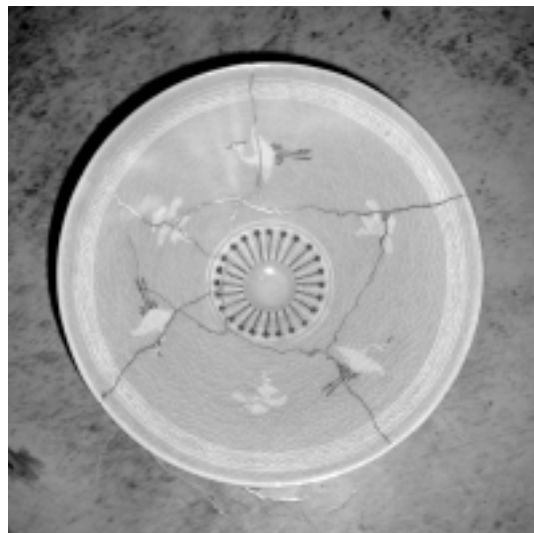
つまり、金繕いは塗師や蒔絵師が本業の片手間に行ったものであり、金繕い師という専門職はあまり存在しなかったと言える。

さて、金繕いした器が何故風流人の目を引いたのか。それは、金で表した割れの形状が新たな景色となり、我々に強く迫ってくるからである。

侘び、寂にも通じるこの美意識は日本人特有のものであろうか。否である。欧米人は日本人と同様、繕われた品々を認め、逆に最高級の言葉で褒めたたえる。

この人間に共通な美意識を反応させるものはいったい何なのか。私は自然の表す形状だと思う。墨色の空を切り裂く稲妻のように、金で繕われたラインは美しい。

自然がおりなす形状の美を認識すること。それが造形を行う者にとって重要な基礎知識になることは間違いないと言える。(ひらさわ はくすい)



金 九漢作・青磁象嵌雲鶴紋平茶碗
(148mm×57mm 高台径37mm)

特集 授業の極意

第 2 回

立体の巻

子どもが創る世界に迷い込んでみよう

近年、時間数の削減も理由に加えて、立体に表す内容は大人の都合からあまり歓迎されてこなかったようである。展示会のとき飾りにくい、準備室に保管しにくい、毎回の準備や後片づけが大変、たくさんの道具を使うことになるので管理がめんどくさい…。

もっと根底的な問題は教師自身の体験がないのである。いわゆる彫刻をかなりの深さで体験する機会は小学校の先生は当然、中学校の先生にとっても保障されていない。

そして何よりも決定的なのは従来から彫刻を評価する言葉は「力強い」「量感」「躍動感」…など男性の好む言葉で語られてきたことである。「フワフワ」「かわいい」…というような言葉の対極に位置づけられてきた。

この不満はくすぶって、形を自在に変える布や空気をキーワードにしたソフトスカルプチュア、ミニチュアモデルのフィギュアなどが時代の精神として強固な彫刻神話に突破口を見出してきた。

そこで一切の不自由な視点を捨てて、子どもの活動に寄り添ってみる必要がある。粘土、枯れ枝、葉っぱ、貝殻、石などが人、鳥、魚、いたらしいなと思う動物や恐竜、怪獣まで彼らのイメージを広げてくれる。彼らは創る。道具や技法は必要感に迫られて、はじめて意識の中心に座る。これらの流れは当たり前のことである。

もちろん彼らのイメージがすぐ形になるわけではない。何回もの試行錯誤が必要である。材料はそう簡単には思い通りにならない。自分のイメージがあいまいであったことに気づく。作品とやり取りする時間の中でまさに自分が育っていく。

立体の題材立ち上げは簡単。子どもと一緒に彼らが解釈した世界に迷い込んでみればいい。

活動的な中学年での「造形体験を豊かに厚く」が授業の極意

東京都立川市立西砂小学校 石川 由美子

はじめに

4年「板や枝を使った造形」を題材にして(1)自然素材を使って動物や植物、乗り物、建物などの具体物をつくる。(2)造形的な面白さを求めた抽象表現でつくる。2つのうちどちらか好きな表現方法を選んで、楽しみながらつくる。材料の特徴や自然の形を生かしてつくる。

1. 自由な活動を引き出す極意

材料を欲しいだけもらえるとなると、何かをやってみたくするのは自然の流れ。小枝や丸太、板材、角材、垂木、竹など。様々な素材を図工室や廊下のすみに、階段下の物置に、と置く。最初は児童が、自分の目で見て気に入ったものを2~3本選ぶということがポイント。この行為が造形意欲をかきたてられる極意である。一巡してからは、欲しいだけ何回でも取りに行けるようにする。好きな枝ぶり、太さ、形、大きさなどを選ぶのも大きな楽しみである。あれこれと物色する活動が造形意欲の深まりへの誘いとなり、木の色、皮のつや、木目に心を動かされ、木の種類によって香りが違うことも発見するにちがいない。

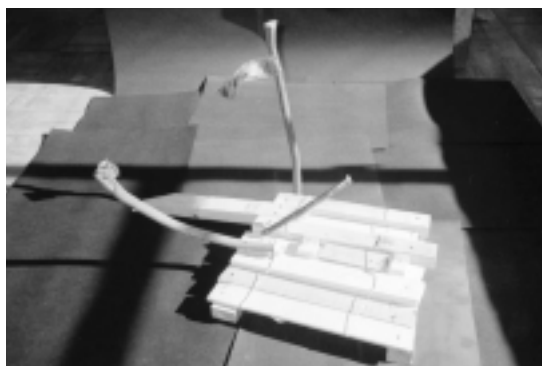


2. のこぎりの扱い方の極意

片刃、両刃、大小、さまざまなのこぎりを用意する。替え刃があるもので、児童用の丈の短い

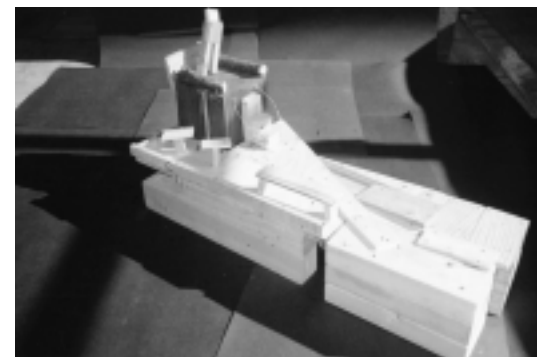
のこぎりをたくさん用意する。これは少々刃が欠けても気にせず使うことにする。

枝ぶりがよく、板の形や木目にほれほれすると、切る喜びがわく。切りたい気持ちが大きいと、木が堅すぎたり、児童にとって太すぎたり、大きすぎる木材だと思っても、そこは何とかしたい、がんばってみたいと考える。そして、使うのこぎりをさまざまに試してみて、材質の違いによって使いやすいのこぎりがあることを自ら発見していくのである。



3. かなづち、くぎの打ち方の極意

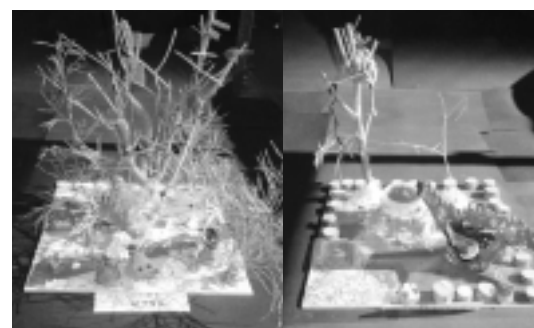
色々な長さのくぎを用意しておく。角材、板材、枝に対して「適切なくぎはどれか？」など考えずに、使いたい長さのくぎを自由に使用させる。最初は誰もが太くて長いくぎを使いたがる。くぎへの憧れである。くぎ打ち遊びのつもりでばんばん打つ。ところが、木とくぎの相性が適切でなければ、板や枝が割れたり、途中で、その先には一歩もくぎが入っていかなくなったりする。そんな時、友だちにやってもらったり、気持ちを入れかえて挑戦し直す。どうしてもだめなときがあることを悟る。そして、別の木にしたり、つぎ当てをして解決することになる。こうした経験を通して、児童は木の素材やくぎの抵抗力を体で感じ取っていく。



4. 活動の途中で発想を広げ、深める極意

板や枝が割れてしまったときや思った所にくぎが入らなくなったときは、同時に次の発想につながるチャンスでもある。仕事が詰まったところで立ち止まり、そのことで他の材料を見つけてきたり、別の所に前と違ったつけ方をする事でぐーんと造形的に広がっていくことがある。新しい発想が生まれるときでもある。

くぎがついたままの木は別の箱に入れておき、児童は新しい材料に移る。くぎを抜くことを優先すると前にも後ろにもすすめなくなる。そこで、当面はくぎをつけたまま放置する。すると、気持ちよく心を切り替えて新しい発想で次のことに取り組める。



5. 後片づけの極意

作品完成までの過程は、いくつもの作品をつくっては壊すものになってしまい、形には残らないことが多いが、結果的にはたくさん作品をつくったことになる。活動でいえば、一本の木を切るだけの1時間になる場合もある。しかし、木との格闘では、素材や道具との関わりで確かな手応えを掴んだはずである。

作品を完成させ、鑑賞しあった後は、もう一仕事である。それは、いくつもの段ボール箱に入れた、くぎがついたまま放置された板や枝である。「今日は、これらのくぎをどれだけ抜けるかやってみよう」の授業である。児童は驚くような技と早さで次々とくぎを抜いていく。実にうまい。生き生きと喜ぶ姿は、児童が確かな力をつけた証と見てとれる。

6. 材料の集め方の極意

ふんだんに使える魅力的な材料はどこからきたのだろうか。

第1には、学校の校庭にある木の枝である。自治体によっては毎年、あるいは2~3年に1回造園業者が来て木の剪定をするので、そのときに頼んでおく。「長さはこれくらいに切ってくれ」「小枝に分かれているように切ってくれ」と解りやすく具体的に頼んでおき、児童が使いやすい長さに束ねてもらう。段ボール箱に立てて入れておくことで便利で使いやすい。

次は、校内の伸びた木を見つけて切ってもらう。本校の場合は、プール脇の姫リンゴ、花梨や藤づる、竹の何本かを、使う際にボランティアに切ってもらった。

第3は板材、角材である。本校の周りはたくさん家が建ち、住宅ラッシュだが、その中の1~2軒分のもので分量がまかなえる。最近の家は新建材で、現場では組み立てるだけのことがほとんどだが、それでも、大工さんが入っている間は板材から角材など、香りのいい、きれいな木目の新しい立派な廃材がたくさん出る。現場監督にお願いすると気持ちよく分けてもらえる。

第4は学区内の製材所からいただく。例年、校内のやきいも大会などで端材を届けてもらっているので、図工でもと特別にお願いをした。厚さと長さが揃った板や小割なので、児童は手軽に扱って使いやすいようである。

同じようなものがたくさん手に入るかどうか、教材として授業で使えるかどうかということにもなる。身近に目をやると意外なものが見えることに気づく。それをどのような手順でどのように使っていくか、指導者として考える楽しさがある。

(いしかわ ゆみこ)

立体にも思いを込めて

—「ルンルンマスクット」(2年生)の学習を例にして—

静岡県静岡市立清水興津小学校 新村 記代

1. 夢中になる題材で

子どもたちにとって、よい題材であれば、夢中になって取り組み、持続力、追求力も強くなっていく。そして、創造性も、情操もつちかわれていく。

子どもたちの興味、関心をとらえ、学年に応じて、身につけさせたい力をはっきりさせ、楽しく工夫できる題材を考えたい。

テーマと材料を考える時、次の4つのパターンがあげられる。

- ①テーマも材料も同じ
- ②テーマは同じで、材料が違う
- ③テーマは違うが、材料が同じ
- ④テーマも材料も違う

①の両方同じ場合だと、同じような作品になりがちであるが、同じ条件のなかで発想を変え、構想する力をつける場合も考えられる。



「6つの材料」

本題材では、④のテーマも材料も違う学習を試みた。

いつもとは違う、思ってもいない材料を使い、新たな発想、工夫ができるようにしたいと思った。

安価なスポンジ、ポリタンク、ざる、ロート、ネット、メガホンの6つの材料を用意し、その中から一つを元に作る。具体物になっていない、工夫可能な材料を選んだ。

2. 自分の思いを表現したくなる導入を

よい題材であっても、「はい、これをやりましょう。」では、意欲や興味も半減してしまう。立体作品においても、自分の思いをもって表現するよう

にしたい。

そこで、子どもたちが自然にひき込まれ、イメージしたり、早くつくりたくなったりする導入を工夫することが大切である。

本題材では、材料との出会いが大事である。わくわく、どきどきしながら取り組んでほしいと思い、次のように導入を考えた。

まず、親戚の正男君からお手紙がきたということで、子どもたちにお手紙を読んであげるようにする。

ほくね、とってもいい物つくったから、絶対お知らせしたいと思ったんだよ。この前、大掃除の時、棚の上を整頓していたら、おじいちゃんにもらった気に入っていた物が落っこちて壊れちゃったんだよ。残念で残念でがっくりしてたんだけど、「そうだ、自分でつくってみよう。」と思ったんだ。整頓していて出てきた物で、何にしようかなあといういろいろ考えてつくったよ。今まで見たこともないマスクットができてうれしいよ。自分の部屋に行くのが楽しいんだ。

みんなも、気分がよくなる、元気が出る、可愛い、愉快的、面白いの作ってみてよ。

材料を一人一つずつプレゼントするからね。

そして、大きな袋に入った包みの中から一人が一つを取り出し、包みを開けて、材料を取り出す。あちこちから、歓声や驚きの声が上がった。



「材料の包みを取り出す」

「こんなの出てきたよ」

3. つくる前にイメージトレーニング

材料をすぐ切ったり、接着してしまうのではなく、つくる前にイメージトレーニングをして構想を練ることが大事である。材料をいろいろ動かしながら何にするか考えることによって、想像力がつちかわれていく。低学年では短い時間でもよいし、中高学年なら、設計図を描くなどして構想することになる。



「何にしようかな」

4. 生かす材料と接着

段ボール、プラスチック容器、その他の材料でつくるときにも、その特質を生かして、何をつくるか考えたり、それに必要な材料をつけ加えたりすることが重要である。

接着がしっかりできないと、すぐ壊れてしまったり、思うように組み立てることができなったりする。材料によって、接着が合わないこともある。また、材質の違う物同士では、うまくつかないことがある。今は、いろいろな物がつく接着剤も開発されてきて、かなり改善されてきた。

接着も、単に接着するためだけでなく、接着即装飾にすると、一石二鳥である。カラーガムテープ、カラービニルテープなどで、配色、位置などを考えて貼っていくと装飾にもなる。

日頃から、家庭で、箱や袋などに材料を集めておいて、必要な時にすぐ使えるようにしておくと便利である。みんなが共通で使う物は、学級で用意しておきたい。



「みんなで使う材料」

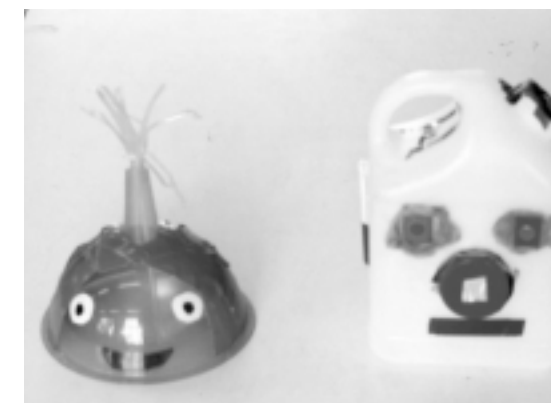
5. つくりながらレベルアップ

初めに、つくりたいものをはっきりイメージすることは大事であるが、そのまま変えていけないのではない。つくっていくうちに、ちょっと変えた方がよいと思ったり、もっとよいひらめきをしたりすることがある。これが、とても大事で、一生懸命考えていればこそである。

つくりながら試行錯誤し、よくなったり、うまくいかなかったりする。その積み重ねによって、想像力がつちかわれていく。

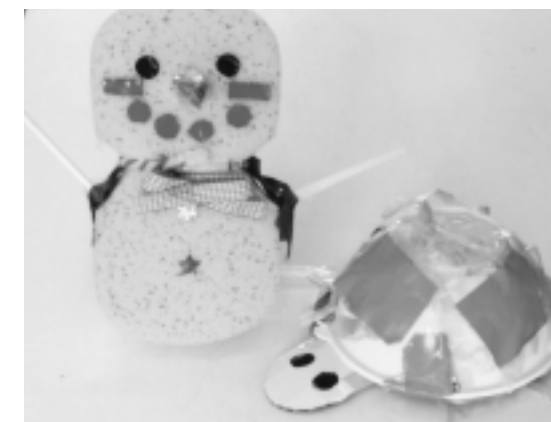
制作途中で、友達同士で鑑賞し、話し合うことも、次への意欲、見通しとなるであろう。

(しんむら きよ)



「鯨の水しぶき」

「ロボピエロ」



「照れ屋な雪だるま」

「恥ずかしがり屋の亀」

わたしの〇〇オブジェ — 宍道湖で見つけたよ — 中学年(3・4年生)の実践から

島根大学教育学部附属小学校 松本 真理

私の勤務校のある松江市は「宍道湖」を囲んで広がり、この「宍道湖」に関わる〈人・もの・こと〉は教材として様々な教科で生かされています。

本実践は総合的な学習で「宍道湖」とのかかわりを深めたことを基盤に、さらに表現対象としての「宍道湖」に出会った活動です。

全国津々浦々の小学校区に、子どもたちのくらしと深く関わる学習資源があり、各地の学校で活用されていると考え、実践の中での「立体に表す」造形活動としてのポイントを紹介しします。

ポイント 1

子どもたちの〈つくりたい思い〉の基盤になるもののがやしを大切に造形活動を構想する。

子どもがその子らしい深い表現への思いを抱くことができるような題材との出会いは、〈つくりたい思い〉を強く育む。本題材で子どもたちが出会った「宍道湖」の魅力は、次のような題材としてのよさから生じると考える。

- ・子どもが湖岸で見つけることのできる材料として、貝殻・流木・石などの自然素材や、波に洗われた硝子片や陶器片・網などが豊かにある。
- ・宍道湖の生き物や湖由来の昔話が、子どもたちの想像力をかきたて創造性をふくらませる。
- ・子どもたちが日々のくらしの中で宍道湖の産物や情景を身近に感じている。

子どもたちは、以前に総合的な学習の時間「松江探検発見し隊①宍道湖発見」で湖と出会った。その時、しじみ漁師さんと出会い、しじみ取りを体験し、近くの寺の和尚さんに湖の龍と大亀の昔話を聞き、波音を聞きながら座禅をした。

このように子どもの心に印象づけられている宍道湖との関わりを生かすことで、より自分らしい造形表現につなげることができる。と考える。

また、図画工作科にとどまらず、他教科・領域



での体験を表現対象と出会う場に構築できるように探ることは、子どもの造形表現への意欲を高めるための一つの方法になると考える。

各学校に子どものくらしに深くつながるような地域ならではの〈人・もの・こと〉があると思う。そしてそこには、教師の出会い方の工夫によって、何度でも出会い直し、再発見できる面白さがあるのではないだろうか。

ポイント 2

表現材料探しから、一人一人の造形表現が始まる活動を進める。

本題材の第1次では、材料探しや湖岸での造形遊びなどの活動を行い、図画工作科として造形表現の対象としての「宍道湖」に再び出会った。この材料見つけが、子どもたちの表現への思いや発想を深め、造形表現を追求する力につながった。また、題材名を、宍道湖で見つけたもののかかわりから生まれた一人一人の〈つくりたいものや思い〉を「〇〇」に入れて表せるように「わたしの〇〇オブジェ」とした。これは、自分と宍道湖のかかわりが題材名になって見えるようにすることで、より自分らしい関わりを大切にできると考えたからである。

材料探しの活動では、以前しじみ取りをした湖

岸で、貝殻や流木などから使いたい材料を見つながら、何かの形に見立てたり、砂の上に気に入った形や色合いで材料を並べたりする子どもたちの姿が見られた。つまり、子どもたちにとって材料探しは表現活動につながる〈つくりたい思い〉を高めていく過程であり、つくりたい立体を発想し、材料選択や用具の使い方を考える活動が始まっていると言える。だからこそ、見つけたものの形や色や質感などの材料のよさや美しさを子どもが発見した時には、教師は子どもの発見の驚きや喜びをしっかりと受け止めて共に感動したい。教師や友だちなど他者と美しさを共感する体験は〈つくりたい思い〉を支える一つと考えるからである。

ポイント 3

〈つくりたい思い〉を形にすることを支えるための材料・用具の環境づくりを工夫する。

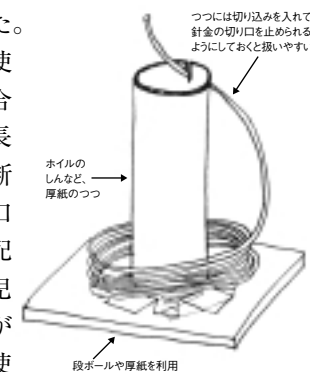
使用する材料や用具の特徴を情報として子どもに伝えと共に、子どもが試したり、したいことに合わせて選択したりして効果的に使用できることをねらって材料・用具コーナーを設けている。

この児童は流木の形から龍を発想し、初めに龍の顔をつくった。できた顔がとても「やさしい顔」になったことから、題を「やさしさいっぱい のりゅう」と決めて、その感じを出すための材料を探して龍の体をつくっていった。そこで、教師は児童が思いえがく龍の形や様子を聞き、子どもは思いを語ることで自分の構想を確かにできるようにした。その後、児童は龍の体がゆっくり動くようにしたいという願いをもって、体に使う3本の流木の接合方法を工夫したり、流木に貝殻や小枝などを接着して龍の体をつくった。そこで、教師はその活動を見守り、〈つくりたい思い〉を形にするための時間を充分保障すると共に、流木の接合にはドリルで木の端に穴をあけて針金を通して接合する方法がよいこと、小枝を組み合わせて接着するためには速乾で木材の接合に適した接着剤が適していることなどを材料コーナーで提案した。



児童は用具を選び、試しながら自分のつくりたい龍を形づくっていった。

このような針金の使用は、初めて扱う場合は、予め使いやすい長さに教師が切断し、断面を丸く曲げて切り口で傷つかないように配慮する。本題材では児童に針金を扱う経験があったため、自分で使いたい長さにペンチで切ることができるよう、図のような段ボールに筒状の厚紙(ラップの芯を切断したもの)を立てた物に、巻いた針金を入れた。



また、接着剤の使用にあたっては、材料によって適する接着剤を選んで使用できるように支援した。例えばホットボンドは接着時間が短い一方、滑らかな面の材料では剥離しやすいため、まずホットボンドで接着し、その後木工用ボンドで接着を強化する方法を提示した。

最後に、中学年という子どもの表現のありようを考えると、その姿は次のようにイメージできる。一つは、初めに自分がおよそ表したいことを構想し、表したいことがよく表れるように、つくりながらつくりかえていく姿。もう一つは、初めの構想をもとにある程度の製作の見通しを立ててつくる姿である。また、題名も「宍道湖の亀」というように具象的である場合と、「宍道湖の波」のように抽象的である場合があると予想できる。そこで、各々のよさをとらえ、個に応じたはたらきかけに生かすために、私は活動の様子やワークシートの絵や文から一人一人の発想や表現方法につながる構想をとらえて支援するように努めている。このとき大切にしているのは教師が子どもらしい造形表現のよさをとらえ、多様な表現過程に柔軟に対応しながらその子らしい表現を見守り、表現のよさが子ども自身に分かるように価値づけるなどの言葉かけである。

また、豊かな造形表現は子どものくらしと密接につながっていることを考え、教師自身が地域素材の良さを見つけ、それを造形表現に生かす喜びを実感する営みが大切であるとも感じている。

(まつもと まり)

オアシスで彫刻体験

— 材料を工夫して、彫刻の基礎を学ぶ(5年生) —

山梨県甲府市立富士川小学校 望月 好則

はじめに — 材料の工夫 —

彫刻といえば、通常は木や石膏を造形材料として行うものですが、図工の時間の削減などによって、じっくり時間をかけた本格的な彫刻に取り組みにくいのが昨今の現状です。そのような場合に、材料を工夫すれば、時間をかけず簡単な道具で彫刻の学習ができます。

「オアシス」という素材があります。もともと造形活動に使う材料ではなく、「フラワーアレンジメントをするときに、切り花をさして安定させる緑色のスポンジみたいなもの」といえば、たいいていの人々が「ああ、あれか」とその感触を思い出すことでしょう。そのオアシスを彫刻の材料として用いることで、長時間をかけずに立体作品をつくるのが可能です。



材料を用意する

一口にオアシスといってもいろいろあります。種類によってその感触や質感に若干の異なりがあります。その中で、水を吸わずに使用するドライフラワーアレンジメント用のものが、造形材料としては最も適していると思われます。オアシスは、ホームセンターや100円ショップなどで調達することができます。

材料の性質や特長を知る

オアシスの彫刻といっても、基本的には木や石膏を彫刻するのと変わりません。ただし、木や石膏を彫るような専門的な道具は必要なく、身近にある道具で簡単に彫り進めることができます。



彫刻をする前に、まずオアシスで遊んでみて、その感触や性質を知ることから始めます。指を突きたてればズブズブと穴があき、カッターナイフなどの刃物で簡単に、しかも気持ちよく切ることができます。オアシスはもともと花をさすためのものなので、木の枝や竹ぐしをさしてもおもしろいです。削って加工するだけでなく、他の素材をつけ加えていくことができるのが、木や石膏とは大きく異なるオアシスという素材の特長といえます。

オアシスを切ったり削ったり、何かをさしたりなど、子どもたちには自由に活動を楽しませ、その性質や特長をつかんでもらいます。

彫刻を行う

オアシスの性質や特長を十分理解したら、次の段階として、オアシスを材料に彫刻をします。モチーフは自由です。建物を削りだしてもよいでし

ょうし、人物や顔を彫りだしてもよいでしょう。オアシスと向かい合って心に浮かんだイメージを削りだしていきます。

《建物を彫刻する場合のコツ》

例えば、れんがのような形をしたオアシスから東京タワーのような尖塔型の建造物を削り出す場合には、まずその側面や底面にあたりをつけます。「あたりをつける」というのは「見当をつける」ということです。木を彫って何かをつくる場合には、通常は鉛筆やペンであたりをつけていき、その線を手がかりに彫っていきます。オアシスの場合には鉛筆やペンでは線が描けないので、先がとがったもので表面に傷をつけてあたりをつけていき、その線を手がかりに彫っていきます。

不要な部分をおおざっぱに削りとりときには、カッターナイフを使うとよいでしょう。カッターナイフの刃を長めに出し、不要部分を大胆に削り落とします。カッターナイフでオアシスを削るときの感触は実に心地よいので、作業しながらその感触も楽しませたいものです。

だいたい不要部分を削り落としたり、細かい部分の細工をします。その場合、もちろんカッターナイフを使って細工をすすめていっても構わないのですが、部分によっては道具を持ち替えた方が効率よくできます。例えば、窓などの部分の形を整える場合には、カッターナイフよりも平刃や切り出しなどの彫刻刀が大変有効です。



丸い穴をあけたいときには、クッキーの抜き型などが大いに役に立ちます。身近にある道具を工夫して使うことで、活動の幅が広がります。

削りかすも捨てずにとっておき、地面を表現する材料として作品を飾るときに下に敷くのもよいでしょう。

《人物や顔をつくる場合のコツ》

人物や顔をつくる場合も、建物と同じく、はじめのうちはカッターナイフで大胆に削り落としていきます。

顔を彫り出す場合には、直方体のオアシスの角を利用して鼻をつくと立体感を強調することができます。目玉をつくる場合には、刃物で彫り出すのもよいですが、目の位置にビー玉などを埋め込んで輝きのある生き生きした目を表現することもできます。毛糸や麻ひもを束ねて竹ぐしや針金にくくりつけ、それを頭部に差し込み固定することで、髪の毛をリアルに表現することもできます。



人物をつくりたい場合には、別のオアシスで胴体や手足をつくり、仏像の“寄せ木造り”よろしく組み合わせて表現していくとよいでしょう。接合するときには、割りばしや竹ぐしをさして2つのパーツを固定する方法がおすすめです。

終わりに

簡単に扱える材料を用いることで、小学生にも彫刻の基礎的なことを学ぶことができます。このように材料を工夫していくことも大切ではないかと思います。

(もちづき よしのり)

子どもの椅子

FROM

熊本県熊本市立春日小学校
西尾 環



私は、今年度、教員になって初めて担任を離れた。新採以来二十年以上続けて学級づくりに力を注いできた私にとって、それは寂しいものであった。代わりに、教務という仕事の傍ら、図工専科や図工TT(担任の支援)として授業を行うことになった。これは、うれしい代償である。

校内の子どもたちの反応はさまざまであった。5年生の子どもたちは「先生はもう担任はしないのですか?」と時々話しかけてきた。3年生は、廊下ですれ違うたびに「先生、今度の図工はいつですか?」「早く図工をしたいです」と声をかけてくる。1年生においては、私が教室の横の廊下を歩くだけで

「あ、すここの、にしおたまきせんせいだ!」

と叫んで手を振る。専科としては3年生以上であるが、低学年とも図工TTとして授業で関わっているのだ。

1学期の初めに、1年生担任から、TTとして粘土の導入の授業をしてほしいと頼まれたことがあった。だが、実は私は1年生の担任経験はなかった。

授業の最初に、私が手を上下に重ね、粘土の塊を手の平でこころろ回して、丸いだんごを作ってみせると、「わあ」と歓声が上がった。単純だ。

次に、粘土を両手で左右に挟さんでこすりながら、「あれよあれよ、長いひものできあがり

~」というだけで「すげえ」を連発。「へびみたいだあ~」との声も聞こえる。そこでひもの先をちよいつまんで、割って口にして指でへびを動かしながら、腹話術風にお話をするだけで、大喜び。

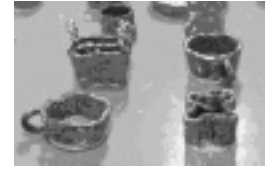
「粘土はこんなふうに、いろんな形に変身できるんだ」と話すと、うれしそうに粘土を手にとって、さわり始めた。

「大きい粘土は、こうやって体いっぱい使ってこねるといいよ」とやって見せた時は、すぐにみんな椅子から立ち上がり「よいしょ、よいしょ」と足を踏ん張って、声を合わせて楽しく粘土をこね始めていた。学級全体が自然とリズムに乗って揺

れ始めていた。1年生との図工はこんなに楽しいのかと、わくわくした瞬間だった。

6年生では、冬に、個人の卒業記念制作として「陶芸」に取り組んだ。子どもたちは、手びねりで、湯飲みやコーヒークップ等、自分が使えるものを一生懸命につくった。指導者として来てくださった外部の方が出入りしている窯元で焼いてもらうまでの期間がある。

子どもたちは、会うたびに「まだできあがってこないんですか?」と言う。待ち遠しくしているのがわかった。それが先日焼き上がってきた。テーブルに並べられた作品群を見て、子ど



もたちから喜びの歓声が湧いた。自分の作品を手にして、うれしそうに見つめるつづらな瞳が、印象に残る。

もうすぐ図工専科としての1年が経とうとしている。昨年度までと違って、全校の子どもたちと楽しく授業ができて、ある意味幸せである。

(にしお たまき)

図工室

美術室

図画工作科の学習内容が「A 表現」「B 鑑賞」の二領域となり、子どもに力がつき明確な評価が行える「鑑賞活動」をカリキュラムに位置づけていく必要性を感じている先生も多いのではないだろうか。

多くの学校がそうであるように本校も近隣に美術館があるわけでもなく、作品の鑑賞はこれまで友だちの作品を見合うことを中心に行われてきた。時数削減の中、移動時間をかけて出かけるのも難しい。しかし、生涯教育ということを考えると美術作品に触れる鑑賞も取り入れていきたいと考えているのは私だけだろうか。

そんな折、京都造形芸術大学の福のり子教授のお話を聞く機

図工室の鑑賞教育を考える

湯浅 大吾(北海道札幌市立伏見小学校)

会に恵まれた。

自身も勤務されていたMoMA(ニューヨーク近代美術館)出身のアメリア・アレナスさんの実践する「鑑賞者による対話型鑑賞教育」の日本の美術館での普及をめざし、人材育成されているという話を聞く中で、まさにわれわれが図工室で美術作品の鑑賞に取り組むならこの方向だなという共感をもった。

どこの学校の音楽室にも色褪せた音楽家の写真が提示されているように、図工室にも芸術作品が提示されていたりするのではないだろうか。本校の準備室

にも美術作品集が眠っていた。それに、美術館で行われているような、子どもが楽しみながら取り組めるアートゲームのような手法を勉強して教材化していくことで実践していけるのではないかと、日々試行錯誤している。

思いを同じにしている全国の先生方、情報を交換しようではありませんか。

(ゆあさ だいご)

396号「子どもの椅子」にご執筆いただいた、高野敏先生の勤務校の記載に誤りがありました。正しくは、霞ヶ関北小学校です。ここに訂正してお詫び申し上げます。

美術雑感あれこれ

中村 公俊(秋田県秋田市立泉中学校)

「美術の時間は他教科と違って正解がひとつではない。ある意味全てが正解ともいえる。だから自由で面白いが、暗記や公式にあてはめれば解答がわかるような単純な勉強ではないぞ。」などと生徒に話す。

「美術作品は客観的に数値化できないから、見る者が違えば評価は変わらざるをえない。」当然のことを再確認する。

「美術は総合教科である。国語なら小説を作らせているという

ということ。手本どおりというのは成立しない。」出発点から他教科と違っている。

「主体性を発揮しなければ、生き生きとした作品は生まれてこない。中学生は、まだ個々の価値観は確立されていないが、あここがや好奇心を刺激することで制作へのエンジンはかかるはず。」まずは導入が生命。

「美術科の基礎・基本は他教科のようにキッパリとは示されてはいない。感性と技能が絡み合って成り立つ総合的な教科で

あるのだから、端的に示しようがない。」美術の弱さの一端。

「やはり評価で悩む。結果よりも表現過程を。わかってはいるが、じっくりこないことも多々ある。」ねらいがあつてこそ評価があるのはいいが、生徒を造形の時間に没頭させられたかどうかを自分に問う。

「美術にスポーツと共通している要素を見いだす。試みや発見が先。理屈は後でゆっくりつけければいい。」理論武装も大切。でも何より大切なのは、今日も生徒の眼を輝かせるよう楽しんで美術を学ぶこと。

(なかむら きみとし)

材料や場所とのかかわりから生まれる造形活動

～とびだせわたし(2年生)～

宮崎大学教育文化学部附属小学校 日高 和広

1. はじめに

2年生も2月にもなると、手のはたらきに巧みが増し、造形活動の特徴として中学年の傾向が見られるようになってくる。友達とのかかわりから発想をふくらませたり、場所の特徴を生かしたりすることもその一つといえる。そこで、この期の子どもたちの発達の特徴を考慮し、材料と場所を自分なりの発想で造形活動に取り入れていく題材を設定することにした。

2. 題材について

本題材は、子どもがよく行う型取る行為をもとにした造形活動である。子どもは自分の手を鉛筆で紙になぞったり、地面にできた影をなぞったりしながら、生まれる形やその行為そのものを楽しんでいる。自分を型取ることは子どもにとって自分をつくり出す行為とも言える。本題材の活動としては、子どもが自分の体を段ボールに型取り、切り抜くことから始まる。そして、そこで生まれた形を身近な材料で飾ったり、気に入った場所に置いたりする。その過程で自分らしい発想や創造的な技能、鑑賞の能力など様々な力を総合的に働かせていくことになる。

3. 活動の流れ

- ①題材についての提案を聞き、自分の体を段ボールから切り抜き発想をふくらます。(2時間)
- ②切り抜いたもう一人の私や材料とかわりながら、思いついた造形活動を行う。(3時間)
- ③切り抜いたもう一人の私を気に入った場所に持ち込んでさらに活動を広げる。(2時間)
- ④気に入った場所で作品を互に見合い、よさを確かめ合う。(1時間)

4. 子どもの活動

①自分の体を型取る子ども

はじめに自分の好きなポーズで段ボールの上に寝転がり、友達にその形を型取ってもらった。子どもたちは型取る方も型取られる方も互いにその行為を楽しんでいた。次に型取ってできた形を段ボールカッターで切り抜いた。はじめは思うように切れなかった子どもたちも、友達と協力しながら、切り抜くことができ、もう一人の私が現れたときには、大喜びで遊ぶ姿が見られた。



②材料を使ってもっと素敵にする子ども

自分の発想に合わせて、クレヨンやカラーペンで色をぬったり、ボタンや糸、布、カラービニルなどの材料を工夫して使ったりする姿が見られた。友達と話しながら自然に情報交換をしたり、手伝ってもらったりする姿もあちこちで見られた。



③気に入った場所で更に活動を広げる子ども

「もう一人の私と一緒に散歩をしよう。」と提案し、子どもたちに気に入った場所で活動させるようにした。ひもをつけて走り、空を飛ぶようにしたり、回旋塔に乗せて回らせたり、ベンチに座ら



せて友達と話をしたりするなど、校内の様々な場所の特徴を生かして、活動を広げたり、温めたりする姿が見られた。



5. 終わりに

子どもは、材料や場所、友達などのかかわりを通して、新たな活動を思いついたり、表し方を工夫したりしている。図画工作科の学習では、このような子どもの活動の姿から題材の在り方や指導の手立てを考えていくことが大切だと考える。今回の題材においては、身の回りの材料だけでなく、校内の遊具やベンチなど様々な場所とかわりながら活動を広げていく姿が見られた。このことは、2年生の学年末における題材の在り方を示唆していると言えよう。

今後も、子どもの発達の特徴を十分に考慮し、子どもが楽しみながら自分なりの表し方を試行錯誤していくことができる題材を工夫していきたい。

(ひだか かずひろ)

卵の中の…

東京都世田谷区立船橋中学校 奥長 英樹

1. 『卵の中の…』

「卵の中には何があるだろう…？」そんな問いかけで始まった題材だった。

中学2年生が、立体としての感覚、形から形をつくり出す美術的な考え、手を使う技術、…そういったことを学習するためにどんな題材が適切か。特に、生徒を目の前にして、イメージをふくらませるような問いかけがこの子たちには有効か。

そう考えていたところに、別役実さんの書かれた『卵の中の白雪姫』（『風に吹かれてドンキホーテ』に収録）という戯曲を思い起こした。卵をめぐる登場人物が思い描くそれぞれの夢を、コミカルにシニカルに描いた心に残る作品という印象だった。そこから、「卵の中の…」という問いかけで、中学生が中学生にとって手応えのある題材に取り組んでみてはと考えた。

2. やわらかいものとかたいもの

『卵の中の…』を題材にするに当たって、素材について、いろいろ考えたが、中身は桂材を使った木彫で、外側は粘土を使って塑像でつくることとした。中身は、いわゆるマイナスの造形(ある形から削って新しい形をつくり出す)で、外側はいわゆるプラスの造形(ある形をつけたして新しい形をつくり出す)ですることとした。

(1) 中身の制作(木彫)

アイデアは、さまざま。「卵の中の…」という問いかけは上々だったようだ。木彫は、生徒にとって、かなり手強い素材だと思っていたが、実際に制作に入ると予想以上に苦戦してつくり上げていた。生徒は、素材の元々の形に、自分のイメージした形



がどのように入っているのかをつかむことに苦勞していた。荒取りから、細部の彫刻へ、小刀、のこぎり、彫刻刀、ヤスリを駆使しながらの制作だった。もちろん、けがに備えて美術室に常備している救急箱も、いつもより頻繁に活躍していた。それでも、生徒は、文字通り力を込めて制作していった。

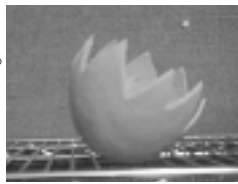


(2) 卵づくり(塑像)



卵の形は、おがくず粘土を使用した。木彫の作品との相性、そして、卵と一体となった時の“木”の感触を大切にしたい。発泡スチロールの型を使い、卵らしさを出すこととした。型の大きさや形状がそれぞれ決まってしまうが、しっかりと卵の中の空間をつくるためには、有効だと考えた。水で浸した新聞を型につけ、その表面におがくず粘土をつけていった。薄さを強調したい、表面のつるつる具合を見せたい等々。それぞれが、自分らしい卵をつくらう、中に入れる木彫とのコンビネーションを考えてつくろうとして、卵の割り方や表面の感じを工夫していた。

乾燥させた卵を割り、中身の型を取り出すときのちょっとした興奮は、まさしく造形の醍醐味である。中学2年生でも「ワクワク…」という感じで、卵を割り出した。無事に割れてできた卵を、自分なりの仕上げで磨く。おがくず粘土を使ってできた卵のあやういがしっかり堅いという感触に触れ、楽しんでいるようであった。堅い木からつくった中身が、柔らかい木からつくった卵の中に…。その手触り肌触りは、今までに味



わったことのない印象を生徒たちに与えたようだ。さらに期待感をふくらませていった。

3. 完成に向けて

「先生ー！かたいよー、これ！」「もー、けずれないー！」木彫をつくる過程では、こんな嘆き!?も聞かれていたが、仕上げていくにつれて、コツコツ削ることがくせ?になり、削らずにいられない、そんな状況で進んでいった。

削り終えて、仕上げをしている時は、桂材の肌ざわりと卵の肌ざわりを楽しみながら仕上げ



いった。そして、両方を組み合わせて展示をしたものを見て、「大変だったけど、頑張ってたよ良かった。」「難しかったけど、やった充実感がありました。」「思い通りいかないところもあった。初めに考えたものとずいぶん違ってしまった。でも、つくりながら形を考え削っていくのもおもしろかった。」等々。一人ひとり、それなりのものが積み重ねられたようだ。何より、今回の題材の一番のねらいである“形を作り出すよさと作り出す質を高める”という点で、生徒はそれなりの手応えをつかんでくれたようである。「卵の中の…」という問いかけに始まり、木彫でつくる・塑造でつくる・



そして両方のコンビネーションを考え、組み合わせ、味わう。その過程で、手と目と自分の感覚をよく働かせ、成長していったようである。

4. 意欲から質を高める

今回の題材では、

○意欲を持って制作に取り組み、造形活動を進んで味わう。

○木彫・塑像の制作から造形活動のよさ・深さ・おもしろさを味わい、次の制作への活力を得る。のはもちろんのこと、

○より豊かな発想を持ち、形をイメージして、それを実現する。

○彫塑の活動を通して、形を作り出す技能と価値観をより質の高いものへと指向していく。

ということをもっとも重視して進めた。そのため授業時間も10~12時間をかけて取り組んだ。

今回の題材を振り返って、意欲を持って取り組みつつ制作の質を高めていく様子を見とることができた。反面、困難な題材(素材)に四苦八苦して、そこで意欲を失いかける様子も見受けられたが、卵の形づくりという制作がまた励みにつながったようだ。生徒の造形活動で、「卵の中の…」イメージを思い思いに発想しつくっていく姿は、とても生き生きしていた。課題として、素材の困難さや技術的なサポートをさらに改善していきたい。

(おくなが ひでき)



地域素材を題材にした3つの実践

静岡県牧之原市立萩間小学校 杉山 哲也

はじめに — 地域素材でねらうもの —

静岡県榛原地区は、山や川、海、また広大な茶園が広がる牧之原台地など多くの自然環境に恵まれている。そんな地域の素材を図工の題材として取りあげることによって、子どもたちが主体的に夢中になって造形に取り組む姿を目指していくことにした。

実践1. 俳句の世界を押し花で表現

相良地区は花壇が多い地区である。地域にある豊富な花を押し花にして貼り絵の素材とし、一人ひとりがつくった「春の俳句」を、貼り絵で表現した。完成した俳句と貼り絵の作品は、地域の老人ホームにある俳句クラブの定例会にもっていき、作品を通してクラブのお年寄りと交流した。



実践2. 地域の伝承をクレイアニメで表現

次の単元では地域の素材として地域に伝わる昔話を取り上げ、それをパソコンでクレイアニメとしてつくるという内容を考えた。全員の意欲を引き出すため地域素材単独でなく、子どもたちに関心が高いアニメを組み合わせるといった試みである。昔話の舞台であるお寺取材し、お寺の方にインタビューしてアニメ作りに取り組んだ。パソコンのクレイアニメ作製ソフトを使って、グループごと場面を分担して作り、その映像をつなげて1本のアニメ映画として完成させた。作った映画は上

映会を行い、たくさんの地域の人達にも見てもらい好評を得た。



実践3. ふるさとのCMを30秒アニメで

3度目の実践は、ふるさとの宣伝(コマーシャル)をアニメで作るといったものである。それぞれ自分が宣伝したい地域の自然・名産品・施設を選んで取材し、30秒の短い映像をつくった。前回の反省として、1本の作品を全員で合作したため、各々が自由に発想したり表現したりすることができなかったことから、30秒CMを一人ひとつつくるという形を取り、それぞれの思いや構想が自由に表現できるようにした。完成したCMは牧之原市の情報発信課の方や地域の方々に見てもらい、意見や感想をいただいた。



おわりに — 子どもたちに育ったもの —

最初は地域の素材を楽しみや意欲をひきだす手だてとしてとらえていたが、実践をふりかえってみると環境や地域とのコミュニケーションの媒介

物としての効果が大きかった。

- 五感を通して地域素材を体感したり、授業の長い時間中触れることで、素材に対しての思いが子どもたちに醸成されるのを感じた。それは必ずしもよいことばかりでなく「押し花はくさい」「地域の仁王像は東大寺の仁王像に比べると小さい」などマイナス面の発見も少なくないが、事後の感想ではそれらも全部含めて地域素材への愛着を感じているという意見がほとんどだった。
- 製作活動を通して、押し花の先生や、市の情報発信課の方など、近所の人たちとの出会いが多くあった。そのことにより子どもたちの世界が広がった。



子どもたちの作品をみんなにみてもらおう

— 郡山市小学校造形教育研究会(小造研)の取り組み —

福島県郡山市立東芳小学校 佐藤 禎仁

品を見に来てくれることです。絵画を通して人と人がつながっていきます。これが私たち小造研の願いです。



1. 郡山市小造研の紹介

この会は設立してまだ6年の若くて元気な造形教育研究団体です。市内小学校の図工主任を始め、造形教育に情熱を注ぐ先生方が会員です。主な活動は、夏休み中に郡山市立美術館で5週間にわたって小学生の絵画や立体作品などを展示する「風土記の丘の美術展」の企画・運営と冬休み中に郡山市民文化センターで約1週間にわたって小学生の絵画作品を展示する「子ども総合美術展」です。どちらも市民の方々を始め、市外や県外の多くの方々にも大変好評な展示会です。みなさんもどうぞ一度ご覧になってください。

2. 子ども総合美術展

この展示会では、小学生の絵画作品と一緒に中学生の絵画やデザイン、彫塑や工芸などの作品も展示します。小学1年生から中学3年生までの子どもたちの造形活動の歩みの姿を知ることができます。また、会場受付を小学校と中学校の先生方で行うので、先生同士の交流も深まります。そして一番嬉しいことは、絵を描いた本人だけでなくその家族、さらには親戚総出で子どもたちの作

3. 作品審査会

子ども美術展を開催させるためには乗り越えなければならない壁があります。それが「審査」です。子どもたちがいっしょけんめい描いた作品に優劣をつけることは本当につらいことです。しかし、それに立ち向かうことで私たちの絵を見る力や指導力・指導技術が高まるのもまた事実です。描く苦しみ・楽しみと、審査する苦しみ・楽しみを分かち合いながら、子どもたちと共に歩んでいきたいです。(さとう よしひと)